

51年目の在米被爆者

ロスアンゼルス 据石 和

昨年、原爆50周年で、米国の報道関係も私たちの活動への関心は高く、各テレビ局や民間プロダクションよりドキュメンタリーフィルム製作への協力依頼が相次ぎました。また日本医師団による在米被爆者検診事業も十回目となり、ロスアンゼルスでの検診場で日米医師グループや支援団体代表などの記者会見も行いました。検診中も毎日のように取材を受けました。私たちの二十数年にわたる草の根式平和教育運動は、はやかなものではありませんが、徐々にマスコミにも伝わってきました。新年を迎えるたびに「平和教育はこれからだ！」との決意を新たにしています。「不可能な夢物語」という人もいますが、たとえ1%の希望であれ、原爆を受けた私たちが続けねば、と決心しています。学校に一人でも熱心な先生がいれば平和教育のチャンスはあります。毎年つづけて声をかけて下さる学校もあり、その近くの学校にもひろがっています。アームストロング氏（既報）も地区の学校等で活

躍されており、活動資金問題でも熱心に調査されています。

私たちが在米被爆者は米政府よりの援助はありませんが、健康を害し生活苦となった時は、社会福祉援助で最低限の生活も可能となってきました。医療費もケースにより自費となりますが、65才からは医療費80%援助への道も開かれています。

個人の場合、結婚して個人加入し年間の保険料納入後に、保険会社が一方的に調査、被爆者とわかって医療費の支払い拒否の通知をよこし、47才まで自費でした。その後夫の勤める会社で家族として保険に加入でき（無調査）、それは今も持っています。66才になって友人のすすめで医療保護の恩典に無料で加入することができ、先日そのクリニックに通院したら、通院費一日5ドル、薬代6ドル、レントゲン、リハビリは三回とも無料でした。

しのぎよい当地も最近はきびしい寒さで流感もやはり、目下私も悩まされていますが、大病に至らずがんばっています。新聞コピー等同封いたしました。（1・25）
（米国広島長崎原爆被爆者協会）

■カンパに感謝します（敬称略）

高木良子（一万円） 小野卯一、土田恵美子（六千円） 渡辺巖（五千円） 牧野奈美、松原美代子、前田久美子、中村令子（二千円） 植松基、石原佐記男、松尾純子、平松久和、伊藤晋、竹内新平、西尾漢、阪本五十鈴子、梶浦剛朗、才木綾子、河津洋和（千円）
合計四万六千円

■受贈資料一覧

軍縮96・3/5号（宇都宮軍縮研究室） ヒロシマ・ナガサキ30号（被爆体験を語り継ぐ会、田中憲助） 阪神・淡路大震災——私の体験と感想集（山中敏夫） 故小佐々八郎追悼・しのび草（しのび草編集委員会） 国連と軍縮シンポジウム報告書（シンポジウム実行委員会） 戦争と原爆展（戦争と原爆展実行委員会） 告知板278（庄幸司郎） 自分史つうしんヒバクシャ37/39号（栗原淑江） パシフィック・オーシャン（飯塚利弘） 九州・長崎修学旅行記録集（県立朝霞高校・竹内良男） 被爆地長崎の再建（片岡千鶴子・瑠美子著、長崎純心大学博物館） 夏雲の丘（山下昭子著、長崎文献社） すいとんのひ51（町田・反核家族）

■活動日記

- 2・4 仏核実験抗議座り込み
- 2・17 「証言」編集会議
- 2・17 憲法と平和を考える長崎女性の会（沖縄問題学習）／被災協「昭和を考える会」
- 2・29 「もうひとつの3・1を考える集い」盧炳禮氏と交流
- 3・2 国際婦人デーの集い／女性の会（沖縄へ代表派遣決定）
- 3・3 「証言」編集会議
- 3・10 恵みの丘原爆ホームで創作劇上演、証言取材
- 3・21 非核の政府を求める会（本島等氏講演）
- 3・25 原爆資料展示を考える市民連絡協、市に内容変更へ抗議
- 3・30 長崎女性の会（沖縄報告）
- 3・31 原爆資料館の展示を問う市民集会（爆心地にて）
- 4・16 爆心標柱問題で協議

「証言——ヒロシマ・ナガサキの声」第10集 原稿募集！
証言、反核・平和運動、平和教育、文芸など。締切・5月末。

「あとかき」波乱の幕開けをした長崎原爆資料館は、いまも試練の渦中にある。街宣車と怒号で長崎を埋めても歴史の真実は覆せない。アジアが世界が注目している。（N）

発行 長崎の証言の会

事務局

〒852 長崎市栄町18-4
(☎・FAX 0958-62-8725)

【主な内容】

原爆資料館問題特集：鎌田定夫2、浜崎均3、消えた加害写真・市民集会4、中心碑問題（内田伯）6、惜春（山田かん）7、須磨子忌の集い8、自分史づくり（相良カヨ）10、千人の証言者11、フランス原爆展（沼田鈴子）12、新刊紹介13

ヒロシマ・ナガサキ通信

128

1996. 4. 25

空に舞う「ふりそでの少女」たち

4月1日、長崎の新しい原爆資料館がオープンした。だが、開館直前、加害コーナを撤去せよ、との長崎日の丸会や自民党市議団の要求で、展示は二転三転した。開館後も右翼の街宣車数十台が押

寄せ、圧力は続いている。

スミソニアン博物館の原爆展への米国在郷軍人会その他の攻撃を彷彿させる。被害と加害を直視し、人類的立場から教訓を引き出すことを阻もうとする点で、この両者は瓜ふたつである。

同じ時、原爆資料館ではいま一

つのドラマがあった。3月31日、開館式の日、屋上庭園でふりそでを着た二人の少女が空高く舞っているブロンズ像「未来を生きる子ら」の除幕式が行われた。あの日爆死し、ふりそでをまもって茶毘に付された幼い二人の少女。その光景を心に焼き付けた松添博少年が、のちに描いた一枚の絵。そこから展開される物語。

少女たちの一人の母、福留志なさんが住む京都の中学生たちが、その訴えを聞いて募金運動を展開、このほど建立にこぎつけた。

除幕式には93歳の志なさんと家族、中学生たちや関係者らが参加、感動をわかちあった。あの日死んだ少女たちの心は50年を隔てたいま、若い中学生たちの中に、たしかによみがえった。

（「通信」編集部）

「未来を生きる子ら」除幕式にて。
右より松添博さん、福留志なさん、
二男の経怜さん。長崎新聞提供

4/2 福留志なさん (21回)

歴史の偽造は許されない

——長崎原爆資料館の展示をめぐる——

鎌田 定夫

原爆神話の虚構と真実

昨年のスミソニアン博物館の原爆展をめぐる論争は、実にさまざまに問題意識を喚起し、私たちはそこに人間の忘却や愚かさとも知性と良心の輝きも確認した。たしかに米在郷軍人会や米国議会ははじめ、アメリカ国民の多数が、原爆のもたらした惨禍の記憶より、トルーマンやスチムソン、バーンズらが捏造した「早期終戦」人命節約説」という政治神話のほうを信じ込んでいたのは事実である。かつてジョン・ハーシーが「ヒロシマ」を書き、パーチェットが「ノーモア・ヒロシマ」と打電したとき、数多くのクリスチャンたちが原爆投下の野蛮さを恥じ、マッカーサーやアイゼンハワーらも不満をかくさなかった。

しかし、その後の冷戦と核軍拡は新たな「核抑止」神話を生みだし、レーガン、ブッシュ、クリントンと歴代大統領はそれを継承・増幅することになった。

投下されたか（西嶋有厚、青木文庫）や「原爆投下への道」（荒井信一、東大出版会）等で紹介されたアメリカの歴史学者、政治家者たちによる原爆問題研究が、最近の外交文書の解禁・解読によって、さらに説得力をもって私たちの前に現われるようになった。

ガー・アルペロビッツ、バーンステイン、R・J・リフトンその他の労作が一齐に邦訳され、それらの政治神話の欺瞞と虚構性が次々に暴かれるにいたった。

また、昨年四、五月、ニューヨークで開かれた核不拡散条約（NPT）再検討会議にさいして結成されたNGO核廃絶会議や、昨秋ハーグで行われた世界法廷での核使用違法性の陳述など、草の根運動の新たなうねりも生まれてきた。

時間は無為に流れてはいない。時代錯誤の異議申立て

ところで長崎の新原爆資料館建設にさいして、私たちは一昨年から長崎市当局に若干の提言を行ない、その充実と成功を願ってきた。

一つは、それが戦争と原爆の悲惨さ不当性を冷静に証言し、再びそれを繰り返さぬ決意をこめた、真に説得力のあるパブリック・ヒストリーとしての科学性・客観性をもつこと。もう一つは、アジア・太平洋の人々を含めた全人類の良心と理性に訴える人間性、そして地球的視野に立つことであった。

開館までの過程で、長崎の被爆者・市民団体は、日本の侵略加害を含めた戦争と原爆の全体像の追究、特に外国人コーナラーの設置を要望した。ところが昨年末、長崎日の丸会が加害コーナラー設置に反対し、開館まぎわには自民党市議団が加害写真の撤去をせよと。動揺した市側は急遽これを差し替えたが、これは海外からのきびしい反発をかうことになった。

「日本の加害史料を展示すれば原爆投下正当化論を助けることになるから絶対に阻止すべきだ」というのが日の丸会や自民党市議団の異議申し立ての論拠だが、その裏には「大東亜戦争はアジア解放の聖戦だった」という古色蒼然たる歴史観が見え隠れしている。

もちろん、第二次大戦は全体として日独伊三国のファシズムと侵略に対する反ファシズム・民主主義擁護の戦争として戦われた。だ

が、先進帝国主義と後発帝国主義のあいだの戦争としての側面もあり、原爆投下作戦にはさらに反ソ共の冷戦の萌芽さえ見られた。

長崎への原爆攻撃とその被害の実態をリアルに検証すれば、爆心地の浦上刑務所で強制連行された中国人・朝鮮人労働者たちが日本人とともに爆死し、周辺の軍需工場や捕虜収容所では同様に幾万もの動員学徒や朝鮮人、捕虜たちが女や子どもたち非戦闘員とともに無差別に虐殺された。死者たちはそれぞれに日本軍国主義と米原爆帝国主義による二重の被害者となった。加害者は日本帝国であり、また米原爆帝国である。それぞれに加害者としての責任が問われねばならない。したがって、「原爆被害だけを」というのは明らかに一面的で、歴史の偽造にもなる。

スミソニアン原爆展論争から何も学ぼうとしないその頑迷さが、むしろアメリカ人の原爆投下肯定論を鼓舞し、反日感情を煽ることにもなる。このまえ亡くなった仏作家、M・デュラスは「いや君はヒロシマを見なかった」と主人公に語らせたが、長崎にいて今なお「ナガサキ」が見えない人々、万民の歴史づくりを阻止しようとする人々がいるのは悲しい。

長崎原爆資料館

加害展示をめぐる

濱崎 均

「長崎の原爆資料展示を考へる市民連絡協議会」の発足

長崎にもやっと思借りではない原爆資料館ができた。内容も、まだまだ希望したいこともあるが充実している。本島前市長のときに日本の加害責任も含めて展示するという基礎は固められていたが、外国人被爆者コーナラーがないということが報道され、市に申し入れをしようという声が上がった。

一九九五年九月二十四日、被爆者会館で準備会を持ち、その場で



爆心地での「展示を問う市民集会」3月31日

正式に発足し、名称を標題のように決め、次の七団体が構成した。

- ・長崎の証言の会 ・長崎原爆被災者協議会 ・長崎原爆遺族会
- ・長崎在日朝鮮人の人権を守る会
- ・平和公園の被爆遺構を保存する会
- ・平和を考える会

これに後から、・原水禁国民会議が加わり、八団体となった。

第一回長崎市長への申し入れ

九月二十七日、市長とは直接会うことができず、伊藤達也長崎国際文化会館館長と会って「新しく建設される原爆資料館の展示等についての要請書」を渡した。要請のおもな内容は次のとおりである。

- 1 展示の内容 ①太平洋戦争の全体像と原爆投下の原因、
- ②日本の侵略と加害の歴史、
- ③長崎と戦争のかかわり、
- ④外国人被爆の実態。

2 資料展示の企画案の公開

- ①市民の意見を聞く会を開く、
- ②長崎市原子爆弾被災資料協議会の協議内容の公開。

3 名称 長崎の原爆資料館であることがわかる名称にする。伊藤館長と意見交換し、要望が受け入れられる部分とそうならぬ部分とがかなり明確になった。十月二十日に報告会を持ち、新たに市長と面会することを決めた。館長らと話し合い続行

十一月十四日、市役所で助役と面会。十一月二十四日、市への要請の報告会と今後の取り組みを検討し、安斎育郎・加藤周一氏ら監修者へ要請書や資料を送付した。

十一月二十八日に伊藤館長・西崎次長らと面会。このとき「日本の加害問題が原爆容認論になるという意見の人とも会わねばならない」と館長は話した。

長崎日の丸会と協議会の動き

十二月十八日、長崎日の丸会会長・中部長次郎名で市長へ「来春開館する『原爆資料館』の展示内容に関する要望書」が出された。「一方的で偏った歴史観に基づいて原爆容認論を助長する『日本の侵略と加害の歴史』を避けよ」という趣旨である。

市民連絡協議会は、この件と今

後の問題の検討会を一九九六年一月七日に持ち、一月十一日に伊藤館長に申し入れを行った。

中国への加害問題で揺れる

この後、何らの動きもないと思っ

ていると、三月二十二日以後の新聞等の報道で、長崎日の丸の会が三月五日市議会に陳情書を出し、自民党市議団の圧力で（館長はあくまで独自の判断と言う）南京大虐殺の写真が南京入城の、パターソン死の行進の写真が真珠湾攻撃の写真に替えられたことがわかった。

市民連絡協議会は二十四日、直ちに緊急連絡会を開いて二十五日に城田係長と面会し、長崎市長あて「展示内容変更の事実確認と申し入れ書」を渡した。そして市議会各会派へこの文書を配布し、記者会見を行った。その後、このことが中国の「北京人民日報」等で批判され、三月三十日市側は急ぎ「南京入城」をさし替え、決着したが「真珠湾攻撃」は残っている。あわただしい長崎原爆資料館のスタートであった。

開館後、さらに南京虐殺のビデオテープ等をめぐって紛糾。右翼の街宣車が連日押しかけている。

長崎原爆資料館の 展示を問う市民集会

三月三十一日、午後三時から四時四五分まで、爆心地公園で開催。桜は満開だが風は冷たく身を刺した。前面には韓国原爆展で展示

された日本侵略の写真パネル十数枚が並べられた。はじめに戦争・原爆犠牲者と明日の平和のためみんなで黙祷した。今田斐男（長崎の原爆資料展示を考える市民連絡世話人） 昨年八月九日の長崎市長の平和宣言

は「侵略と加害の反省をしないと、核廃絶の声は世界に届かない」とのべた。私達は原爆資料館について、三点の申し入れをした。①展示については、太平洋戦争の経過、日本の侵略と加害、長崎と戦争のかかわり、外国人被爆者コーナー

を設けること。②市民の声を聞くこと。③名称。（しかし市側はまともな対応をせず、助役が三〇分会っただけ）。ところが日の丸会や自民市議団の申し入れに、秘密のうちに写真を変え、中国の指摘により更に再

変更していた。市民の申し入れには一顧だにせず。許せないことだ。川野浩一（県平和労働センター議長） 別問題だが、この中心碑の撤去も問題だ。市長の平和宣言が原爆展示の理念でなければならず、アジアの人々と共存せねば

ならぬ。加害の写真をさし替えていたが、元に戻すべきだ。もっと市民の声に耳を傾けるべきだ。岩松繁俊（長大名誉教授） 市民の声を無視した官僚主義の典型。日本の良心から世界の良心に訴えるべきだ。

徐正雨 朝鮮から連れて来られて体はポロポロ。朝鮮の人々の資料はいっぱいある。展示すべきだ。竹下美美（原爆遺構を保存する会代表） アジアの人々に納得してもらうことが必要だ。中村すみ代（市議） 私も反省

している。でも市民の力も働いているのではないか。最後に①侵略加害の歴史的事実に沿った展示を。②外国人被爆者コーナーの設置を。③幅広い市民の意見を取り上げようとの「集会決議」を行なった。（文責・末永浩）

3月31日 長崎新聞

消えた加害写真

原爆資料館展示変更問題<下>

回避した市民論議

平和宣言確認の時

3月30日 長崎新聞

消えた加害写真

原爆資料館展示変更問題<上>

密室の差し替え

圧力か自主判断か

原爆「中心碑」撤去問題を問う

内田 伯

去る三月二十八日、長崎平和推進協会の理事・評議員会が爆心地公園近くのホテルで開かれた。議題は平成八年度事業計画並びに予算案等であったが、会長である伊藤市長の出席があり、いい機会だと考えて、私は原爆落下中心碑の撤去問題を取り上げて発言した。



(3月31日、中心碑前で訴える徐正雨さん)

この中心碑は爆心地を示す貴重な標柱であること。昭和二十年九月頃から翌年にかけて、文部省の学術研究会議・原爆災害調査研究特別委員会の木村一治研究員(日本

化学研究所)らによって爆心地が決定されたことを述べた。ところが、市長はそのことは今日の議題ではない、すでに平和公園聖域化検討委員会とその後の専門委員会によって「中心碑を撤去し、そこに新しくモニュメントを設置することは、決定済みである」といった態度だった。

このようななかで、長崎の平和運動に取り組んでいる市民グループは三十一日、松山町の爆心地公園で「長崎の原爆資料館の展示を問う市民集会」を開き「侵略と加害の歴史的事実に沿った展示」などを求める集会決議を採択した。集会には県平和労働センター、県被爆二世教職員の会、長崎の証言の会などメンバー約四十人が参加した。

そのあと、私は世話人の今田斐男氏のすすめもあり、爆心地の決定経過と、目の前の原爆落下中心碑の撤去問題について問題提起を行った。

だが、すでに長崎市は、平和公

園再整備事業の一環として、昭和三十一年三月に建立された「原爆落下中心碑」を撤去し、死没者名簿奉安箱と一体化してモニュメントを置き「祈念のシンボル」とすることを決定しており、爆心地の一部では工事が進められている。

これに対し、被爆者団体と平和市民団体は、四月十六日、長崎市の岡町の長崎被爆者会館で合同の会議を開き、長崎市に対して撤去反対を申し入れることを確認した。この合同会議には県平和・労働センターが呼び掛け人となり、新たに県朝鮮人被爆者協議会を含めた被爆者六団体と長崎の証言の会など平和・市民五団体の計十一団体から約二十名が出席した。

この中で「現在の爆心地公園には独特の雰囲気がある。まず中心碑を撤去するプロセスから問題にすべきである。四十五年間、そこにあつたものを変えるには、それなりの理由が必要。平和祈念像の反省を生かすべきである。現在の中心碑は祈りの場として立派に定着している」等々の意見が出された。そして、①現在ある中心碑を生かした公園整備を行うこと、②長崎市の被爆・平和行政の推進に

あつては被爆者団体・平和団体などの意見を十分ふまえること、などを求める要望書を長崎市に提出することを決めた。

このような中で、地元の新聞もコラムで取り上げ、「平和公園が観光長崎の顔の側面が強くなっていくのに対し、爆心地公園は木立に包まれ、ひっそりとした空間を持ち、黒御影石の中心碑は、素朴なたたずまいながら公園に溶けこみ、原爆の犠牲になった人々への慰霊の気持ち自然に起こる」と指摘している。

また、この女神像のモニュメントの設置そのものが、爆心地公園の性格と、その意味を変えてしまうことに被爆者は怒っている。

伊藤市長は、原爆資料館の存在意義を「被爆の実相と核兵器の恐ろしさを伝えるという使命を引き継ぐ場所である」としているが、この資料館を爆心地へとつながる動線としての一体感のある中心碑公園の再整備を考えてほしい。ここにたたずんだとき、五十一年前のあの悲惨さと死者たちの声が伝わってくる、そのような公園にして欲しい、と強く思うのである。

(松山町自治会長、証言の会代表委員)

惜春

山田 かん

急行電車シーサイド・ライナーが松山町から茂里町にかかる立体交差自動車道の下を通過したとき、ふと、この歩道を登って原爆落下中心地公園に出ようと思いついた。家人をうながし浦上駅跨線橋から厚生年金会館横の路地を通り本道に出た途端、浦上川の川風の冷たさに驚き、風邪がぶり返してきた。

寒の戻りのような気温のなかを公園にたどり着くと、久しぶりにみる原爆公園の黒御影石モニュメントの前面は土砂、コンクリート片の堆積に視界も閉ざされて、荒れ果てた印象に驚かされていた。何事が計画されているのか一切わからない。長崎市から他市町に移住したから情報が切れているのは当然として、市民には「市報」などで知らされているのだろう。四月二日の福田須磨子二十二回忌の集いのときは、そう思わざるを得なかった。

四阿ふうの休憩所のベンチで冷えこみながら、この公園のあまり

の変わりように、昔書いた須磨子忌の風景の文章を思い出していた。第七回須磨子忌のことである。「夕暮れに溶けるよう、桜は満開であった。花冷えというよりも花の底冷えともいえる程に身体が

かじかんでくる原爆公園の一隅で、第七回目の福田須磨子忌に集ってきた六十数人の人々は無言のうち

花見の宴であれ屋台の匂いと電飾であれ、爆死者御霊は未だ笑って許してくれるのではないかと、つくづく思っていたのである。

公園の荒廃の意味は翌々日四日の新聞報道で知らされた。「モニュメント建立に伴う原爆中心碑撤去・被爆者らは反対コール」「祈りの象徴的存在」・平和行政新たな論議呼びそう」碑写真入り七段抜きの記事であった。平和公園整備事業の一環として八、九年度の爆心地地区再整備事業(事業費七億円)というのを始めて知ったのである。

この場所を過ぎながらうっすらと思いついたのは、文化勲章の彫刻家T氏製作の新しいモニュメントが昭和三十一年建立の従来の碑

と替えられると報じていた未だ冬のことだった。下の川辺には作業をやめたユンボがキャタピラの片側を宙に浮かしているのが夕靄にかすんで見えた。ぼくらが何気なく見て通り過ぎたこの下の川工事現場で、「平和公園の被爆遺構を保存する会」の竹下美美、阿南詩子代表が被爆がわら、爆死者人骨を採取した、と報じたのは四月十二日である。ここには、視る人の

持続する意志的な動きを思わせるものが存在していたのである。

須磨子碑前の集いはナガサキ誓いの火維持会、宮本圭子さんの司会で歯切れよく進行していったが、男女高校生の福田作品朗読「生命を愛しむ」「少女へ」がひと際ならずやかで、世代への親近を思わせて確かなものであった。

恒例の集いも終り、続いて春の原爆検診、歯医者通い、内科定時通院と予定がたたまれていくなかで、ふと忽ち遠去かかっていく忌の春のことを思うのである。この季の冷気の清々しさがあればこそ、なおさら流れるように消えていった時間の貴重さを、春を惜しむように思うのである。

このように過ぎた或る雨の降りつつく夕暮れ、詩も短歌も書いて

いるMさんから電話があつた。いま「長崎原爆資料館」から帰ってきたところだ、と言っている。びっくりしたのは豪華ホテルのギャラリ風の雰囲気、回廊で連なっていて、何だか見世物の展示のように感じてしまいました。内心は悲しくて電話したのでしたが、このような見方をして悪いのでしょうか、ということのようであつた。

ぼくにも何が変わらなければならぬ理由があるのか分からないのである。本当に最近は分からないことが多くなってきた。そこで持っている一枚の写真のことを話したのである。土饅頭ふうの土盛りの上に白い標があり「原子爆弾落下中心地之標」と黒ペンキ書きであり、周りにブラック建物が数軒。その上空に白い夏雲が浮き、一九五〇年当時と書いてあると説明したのである。(一九九六・四・十五)

第21回福田須磨子忌の集い

爆心地公園の桜は満開だったが「花冷え」どころではない真冬の寒さにふるえた。生前の須磨子の写真十数枚がパネル展示される。長崎生活をつづる会の仲間だった宮本圭子さん(ナガサキ誓いの火維持会)の司会で開会。

谷口綾暉さん(被災協)が「川崎一郎さんとともに原水爆禁止運動統一のために奮闘した須磨子を思い、決意を新たに」とあいさつ。黙禱の後、色とりどりの春の花が碑前に捧げられる。園田鉄美さん作曲・演奏による「童女へ」の歌唱テープが流れた。



参加者発言。はるばる佐賀県嬉野町より初参加した幼なじみの同極楽寺で夜までお経を呼んだり歌ったり。鮑の浦の造船所に帰っていった水兵さんからとどいた礼状を細かくちぎって飲みこんだ情熱家の須磨子さん。生前に会えなかったのは口惜しい。その苦しみと胸がひき裂かれる。声がうるんでいて。宮本さんは昭和49年、大阪からの最後の年賀状を紹介。「死んでたまるか」とあった。いつも「身体の元気なもんががんばらば」と叱咤された、と。

原爆病院の療友だった葉山利行さん(長与町議)は「念願の長与町の非核宣言と平和モニュメント建立が実現した。生ある限り平和を求めて生き抜きたい」と語った。碑建立の中心となった詩人の山田かんさん。「須磨子の思いとあまりに方向違いの現在。この異常な寒さの中に改めて50年前の決意をよみがえらせよう。変ってならぬものに立ちもどろう」諫早市からご夫婦そろっての参加。

療友の崎田昭夫さん。「ひとりと」との強烈な出会いはその後の私を方向づけ、彼女に励まされ続けた。その意志を継ぎたい」鎌田定夫、「童女よ」はここに集まった若い人たちへの呼びかけだ。「終末時計」の針は二転三

転、いま「14分前」。長崎を最後の安住の地にできなかった痛み、長崎駅で背負った軽さを忘れない」同級生の福島康子さん、「この集いではいつも「須磨ちゃん、元気ね？」と呼びかけている。彼女は生きている。そして喜んでくれている」同級生の花橋会からはことしは三人。寒さの中によく来て下さったと思う。

詩人の中村富士男さん、「去年の集いに偶然立ち寄った。昔、生活を綴る会の頃、雲仙合宿で一度会っただけだが、はげしいものを感じた。詩を書き続けながら50年目の空しさがあった。もう一度がらばらにや、と今年も出てきた」大阪の姉、豊後レイコさんからメッセージ紹介。(別項)西高生山下国浩さん、「生命を愛しむ」を朗読し感想を語る。活水高校生谷口絵理さん、「童女へ」を朗読。長崎高校生平和ゼミの生徒たちが草野十四朗先生とともに参加した。須磨子への何よりのはなむけだった。

『生命を愛しむ』を朗読して

(高校生) 山下 国浩

「新しい年の始めに」または「ただえだえに十年」とありますから、だいたい昭和三十年ころの正月元旦の情景ではないでしょうか。しかし普通は楽しいはずの正月も、須磨子さんにとってはそうでもないようです。原爆で受けた心身の傷、肉親との死別、そしてその後の貧しく苦しい生活。詩の中の「十字架」はそのすべての象徴ではないでしょうか。その十字架の重みにじつと堪えつつ生きている須磨子さんが目に浮かぶようです。

「われなお生きてあり」この言葉は新しい年を今年も無事迎えることができたという密かな喜びであったのかも知れません。そして少しでも生き永らえたいと思ったに違いありません。だからこそ自らの生命を愛しみ、大切にしたいに違いないと思います。

現在人生八十年といわれますが、僅か四十年前に須磨子さんは三十数歳にして、自分の生命が存続しているのを「奇蹟の思いで」と書き綴っています。(次頁へつづく)

長崎原爆松谷訴訟

公正判決を求める署名にご協力を！ (用紙同封)

原爆症認定を求めて厚生省を相手に訴訟を行っている「長崎原爆松谷訴訟」は、いよいよことし6月21日に結審し、秋にも判決が言

わたされます。福岡高裁での控訴審第十回口頭弁論が4月19日に行われ、国側が松谷英子さんの障害に「放射線の影響は考えられず、却下処分は適法」との最終準備書面を提出しました。これに対し、松谷さん側代理人の諫山博弁護士(福岡)が意



口頭弁論後、開かれた「長崎原爆松谷訴訟」福岡弁護士会館

見陳述し、「厚生省は欠陥の多い原爆症認定制度を、行政運用の面でいっそう不完全なものにしている」と指摘、「50年以上続いた松谷さんの苦しみを一刻も早く取り除いてほしい」と訴えました。6月21日には松谷さんが最終弁論をして結審し、9月にも判決が出されます。

口頭弁論が終わったあと開いた報告集会で、約百人の支援の人びとを前に松谷さんは「本当の苦しみがわかってもらえるよう頑張ります。」と語りました。

「松谷訴訟を支援する会」では会員増と公正判決を要請する50万署名にとり組んできましたが、現在、署名十万余が集約されています。これはまだ目標の20%、成否はこれからにかかっています。

署名の期限は6月21日の結審の日、あとわずかです。ぜひ皆様のご協力をおねがいいたします。

(署名用紙の送り先は〒852長崎市岡町8-20、長崎被災協内、松谷訴訟を支援する会へ)

私は被爆者にこんな思いをさせた原爆、そして戦争というものがとても許せません。

須磨子さんはすでに二十年以上も前に亡くなってしまいました。反戦・反原爆を訴えたその心は永遠だと思えます。

私は平和の活動を仲間たちと始めてそう長くない若輩者ですが、子ども、高校生平和ゼミの仲間たちなど気の合う人々とこれからも頑張りたいと思います。

福田須磨子忌によせて

豊中市 豊後 レイコ (須磨子次姉)

本日は、22年目の須磨子忌にお集まり頂き有り難うございます。昨年は、戦後50年で、戦争や核問題がマスコミに多くとり上げられ

花万朶

佐賀県三根 美津恵

花万朶福田須磨子を偲びけり
須磨子忌の花ゆさゆさと揺れてお山吹のつぼみの固さ須磨子の忌
須磨子忌の碑に集いけり花満ちて
(須磨子同級生)

ましたが、最近ではその数が少なくなりました。住専問題にあげられている報道の中で、ともすれば私たちは、過去の歴史を忘れがちです。

「いつまでも過去を引きずってはいけません」と言う人がいますが、過去をふまえてこそ未来が拓けると思えます。うやむやにせず、その原因を探り、結果を人々に伝えることは、大切だと思えます。

このことを強く思ったのは、フランスが各国からの批判に耳をふさぎながら、一連の核実験を終了したときです。地球上から核を開放するという日本人の悲願の前に厚い高い壁があることを改めて認識しました。

だからこそ、被爆者の方々は、世界の語り部として重要な役割を担っておられます。かたわらの私達たちは、どう皆様に側面から支援できるのでしょうか。昨年の朝日新聞の論壇で、土山秀夫先生が「よりダイナミックな反核包囲網を」と呼びかけておられました。大いに共感しています。

皆様のご健勝とご活躍をお祈りしています。

被爆者たちの自分史づくり

広島・原爆被害者相談員の会 相良カヨ

被爆者自分史のつどい

数年前から、「自分史」にとりくむ人が増え、戦後五十年・原爆被爆五十年の昨年にはピークに達した感があった。広島でもグループでとり組んだ被爆者の自分史『生きる』が発行され、私も関わった。十九人の被爆者の記録は、五十歳から八十歳台までの半生と、原爆被爆という体験がどのように人生や生き方に影響しているかを、



それぞれの書き方で明らかにしている。

「精一杯書いたけれど、これで全部ではない」という思いは、ほとんどの人にある。生きているかぎりもっと書きたい、という人もいる。私たちも書きつづけてほしいと思っている。だから今年も新たなメンバーを加えて「自分史を書くつどい」を継続する提案をして、二月にスタートさせた。だが、今年新たに参加する人は昨年に比べて少ない。このことをどのように考えたらよいのだろうか。

「五十年の節目」を強調するあまり、被爆者の人生の総括の時期を逸してしまったような印象を、私たちやマスコミが与えてしまっていないか、と反省したり、いや、そんなことはないのだから、回りの被爆者に根気よく「書くことの楽しさや意義、効用」を確認していくことをつづけるのだ、と自分に言い聞かせたりしている。ともあれ、今年、ささやかにス

スタートした自分史グループには、昨年書いたメンバーの内二名の方がもっと書きたいと参加された。Yさんは、昭和六十三年以降とこれまでに書き残していることを書きたい、とはりきっている。Kさんは、戦後の人生を書くことに意欲をもっているが、「家族への影響」を心配して、どのように書くかと悩んでいる。

四月二十一日のつどい

この日の集まりでは、児童文学者の三浦精子さんを囲んで、どんなことをどのように書いたらいいかの話し合いとなった。戦前、戦後の広島を生きてきたなかで、書くことはいくらでもある。「そんなこと書いてもどんな意味があるのか」という疑問にも応えるかたちで話ははずんだ。Yさんの驚異的記憶力と逞しい生き方に感嘆しながら、また、Sさんのように女学生るとき被爆し、戦後多くの職業歴のなかで培った人間関係がいまの仕事や生き方にどんなにプラスになっているかという話にも感動する。そして本当に若い世代や家族に伝えていきたいことを山ほどもつ被爆者なのだ、と思った

りした。大いに笑い、有意義なつどいであった。次回は書いたものを持ち寄ることにした。

この他、つどいに参加する意思表示をされている数人の方へは、個別に支援の方法を検討していくことにした。ゆっくり、しかし着実にすすめるために、今後は『自分史つうしんヒバクシャ』や『ヒロシマ・ナガサキ通信』などとの連携・交流も考えたい。

そこで昨年の経験をもとに、私が感じているいくつかの課題にもふれておきたい。

一つは、被爆者が自ら書くことを通して「歴史の証言者」としての自覚を獲得できるよう、共に歩く「人」と「学習」が要ることを具体的に分かるための方法を確立したいこと。

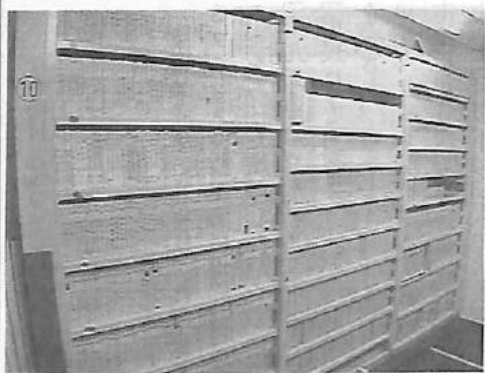
二つは、「自伝」や「自慢史」ではない「自分史」がなせ求められるのかを分かりやすく語り、かつ自分史運動が、原水爆禁止運動や平和運動のなかでもつ意味を積極的に評価し、推進する各地のネットワークづくりとなること。いわば原爆被害の全体像解明と核兵器廃絶・世界平和のために欠くこと

(次頁下段へつづく)

被爆の証言者、一〇〇〇人に

ラジオ番組「長崎は証言する」

長崎放送(NBC)のラジオ番組「長崎は証言する」(日曜午前9時20分から9分間。当初のタイトルは「被爆を語る」)は、被爆者の証言の記録・保存と体験の継承を目的として昭和43年11月にスタート、この3月31日で延べ千人に達した。放送開始から27年5カ月、保存記録は30分テープで約五百本にのぼり、この間担当した記者は23人。証言者のうち数十人、記者も3人が亡くなっている。



証言者には韓国人被爆者や捕虜

収容所で被爆したイギリス、オランダ元兵士らも含まれ、被爆の証言だけでなく当時の生活や核兵器に対する意識など多岐にわたっている。

この番組が27年余も続いてきたのは被爆の実相のすさまじさと、それを乗り越えようとする被爆者の生き方が与えるインパクトの強さ、そして「核兵器がある限り、証言者がいる限り伝え続けたい」という地元報道者としての使命感にあった。わずかな予算で私的な時間もあてての取材・収録を続けてきた。担当者の一人、関口達夫さんは「関わった記者は皆、この取材を通して一人前になった」と語っている。

県内九万人余の被爆者の一人一人に異なる体験とドラマがあり、掘りおこすべき証言は山積している。しかし、あの日から半世紀が過ぎ、被爆者は高齢化し、次々に亡くなっていく。取材は時間とたたかいかいでもある。

数年前から長崎放送では長崎市

と共同で証言ビデオ製作に取り組み、長崎原爆資料館のビデオコーナーで上映されてきた。これらの貴重な証言記録をどう保存し活用するかも大きな課題といえよう。

(文責・編集部)

一人でも多くの証言を

長崎放送 関口 達夫

『長崎の証言』は被爆者の証言だけでなく、核兵器廃絶、日本の加害責任、沖縄・広島との連帯など様々なテーマについて質の高い論文を掲載し、被爆地の論理を形成してきました。

それに比較しますと「長崎は証言する」は被爆者の証言が中心で庶民の戦争・被爆体験の記録とも言うべきものでしょう。

問題は、これらのテープをどう保存しどう活用するかです。貴重な録音テープを劣化させず、いかに長期間保存してゆくか、またどのように外部の方に活用していただくかを今後検討しなければならぬと思います。被爆者の高齢化が急速に進んでいるいまは、一人でも多くの証言を残すという観点で取材し放送しています。

のできない被爆者としての使命を全体的に明らかにして、被爆者を励ますことが必要ということ。

さらに、個人や共同での出版についての経済的支援——現在の「原爆死没者等慰霊事業」での補助金などに加えて——が出来るような方策がとれるか、というようなことを考えている。

どんどん高齢化していく被爆者の現状から考えれば、「時」「人」「金」の面で適切に対応する公私の支援が急がねばならない。そのためにも、私自身、人間としての尊厳をもって生きている被爆者の存在が、多くの若者を励まし、未来への指針となっていくような活動に、自分をつなげていることに確信をもちつづけたい、と思っている。

△付記▽広島・長崎の仲間たちへ
今年六月二二、二三日、広島市で開かれる全国平和教育シンポジウム終了後、証言の会では広島・長崎の証言交流座談会を企画中です。この報告は、そのさいの問題提起となることを期待しています。

(編集部)

「市民によるフランス原爆展」

人類は核と共存できない

広島市 沼田 鈴子

被爆50周年の昨年は、たび重なるフランスの核実験に世界が抗議の声をあげた年でした。その中で「第九条の会ヒロシマ」を中心に「市民によるフランス原爆展」が企画され、ことし1月4～14日にパリ、リヨン、グルノーブルの各市で被爆証言もあわせて実施されました。以下は15人の代表団の一人、沼田鈴子さんの手記の要約です。(文責・編集部)

原爆展は成功だった

神父、シスター、平和運動家コ

1月28日 長崎新聞

リンさんほかの方々の努力で原爆展は成功しました。言葉のできない私も皆さんの援助で証言でき、多くの方と出会うことができました。岡本三夫先生(団長)、大庭里美さん、在日韓国人被爆者の姜文熙さん、それぞれの立場で証言されました。韓国人被爆者の実相を伝える写真も展示されました。

被爆の実相をもっと伝えよう

最初に感じたのはフランス国民が被爆の実相をほとんど知らないことでした。入場者は写真、実物、証言ビデオをくわいするようにつめ、涙を流す人もあり、証言もよく聞いてもらったと感じました。四日午前に全員でピラ配りをしました。受け取ると必ず目を通し大事にします。「同じ気持ちだ。」とか「ありがとう」と言ってくれる人もいて感動しました。中・高生との出合いでは、日本では考えられないほど数多くの質問や意見が出ておどろきました。ある男子生徒の「核抑止論」に

ついでの質問に、いきなり生徒間に大議論がこりまりました。核・原爆・原発などにくわしい化学専攻の女教師がいろいろ説明されました。私が最後に「核は人類や生命あるものを守るでしょうか。否。人類は核と共存できない」というと先生も賛同され、「午後は原爆問題を考える平和学習の時間に行きましょう」と提案されました。退場する生徒さんたちが「ありがとう。これからも世界の人に伝えて下さい」と励ましてくれました。前日に姜さんの証言を聞いた日本人が次の日も来て証言を聞いてくれ、のち親しい友人になりました。

フィリピン修道女アナタさんの話

フィリピン出身でフランス在住の修道女アナタ・グロリヤさんが思いがけない証言をされました。「私は一九三六年生まれ。七才のとき戦争が始まり日本人による虐殺を見た。大工をしていた父は日本軍に傷つけられ、翌年父と父の兄弟は収容所に入れられたが、一人の日本軍将校に助けられた。一九七二年、その将校が父を訪ねてこられた。原爆展を見て胸がいっ

ばいだ。核兵器廃絶のための証言活動に勇気が出た。私もこれから小さいことでも何か始めたい」と力強いいわれ、二人でしっかりと握手して別れました。平和の種は大きくひろがると確信しました。

ムルロアの核被害

ノートルダム放送に出た時、出演者にムルロアでの核被害のことを問いかけたところ「いままで被害は出ていない」と明言されるのでおどろきました。「タヒチの被害者が日本で証言し、私も会っている」と話しましたが、フランス国民は真実を隠されているのです。帰国後、ムルロアでの被害のことを新聞、テレビで知り、私は一晩中眠れませんでした。

フランスで被爆者と会い、話し、聞いたのも、韓国人からの声もはじめてとの声を耳にしました。ハードスケジュールの中で、フランスの一部ではありますが、知ることも多い日々でした。

お世話になったフランスの皆様感謝し、今後も友情を深め、ともに核廃絶・環境保全のためにがんばりたいと思います。

〔新刊紹介〕

■飯塚利弘著

『バシフィック・オーシャン』

ビキニで被曝した第五福竜丸の母港焼津でのユニークな平和教育実践の書。

「いじめ・非行と第五福竜丸」、「受験と第五福竜丸」といった章が続き、最後は「焼津に生きる第五福竜丸」で終る。「焼津の中学生・市民が拓く平和への道」を語る平和運動実践の書でもある。安齋育郎教授の序文も面白い。(かもがわ出版、一八〇〇円)

■北九州勤労学徒・工場OB・市民の会著『原爆 小倉→長崎』

長崎原爆の第一目標であった北九州小倉。「八月九日」に寄せる小倉の人びとの思いが本書を生んだ。北九州の戦争と平和、核廃絶への歩みが豊富な資料とともに紹介される。後半は「手記」篇。47人が寄稿、重い証言集となった。(市民の会刊、一八〇〇円)

■太田一男著

『地球時代の道しるべ——今、憲法九条を世界に活かす』

地球の有限性が見え、共生の社会が追究され始めたいま、最大の浪費と不条理の根源である軍隊をどうするか。本書は日本国憲法による平和主義国家を最も新しく現代的な国家の在り方と規定し、それへの道すじを明示、そこにこそ人間生存の意味があるという。(法律文化社、一九五七円)

4月23日 長崎新聞

平和運動にささげた半生

山下昭子著 「夏雲の丘—病窓の被爆医師」 出版

秋月夫妻の軌跡たどる

本誌に連載、感動呼ぶ

1996年3月19日 中国新聞
母親失った体験 小説に
病押し東区の被爆者
「原爆と文学」に寄稿

五十年目の原点とは何か

——被爆の底から告発する作家

最近、被爆を主題とする小説はなぜかあまり書かれなくなった。被爆・戦後五十年目というのにあの日の記憶は風化してしまったのだろうか。もちろん、一般の被爆体験記は膨大に書かれた。また非被爆者によるルポルタージュやドキュメンタリーも少しはある。しかし被爆体験のある作家や詩人の作品はあまり目につかない。そのなかで、広島と長崎の二人の作家の作品に惹きつけられる。

篠垣潔の病床からの告発

篠垣は広島市の零歳被爆者。まだ五十一歳というのに五年前からはとんど寝たきりである。彼にとっでは、迫りくる死に抗って一日でも長く生きぬくことが核権力へのたたかいである。障害年金を要求し、行政の横暴に怒り、裁判にまで訴えようとする日々を記録。『原爆と文学』『証言—ヒロシマ・ナガサキの声』に書きつがれる迫真的短篇は、被爆五十年の原点そのものの鮮烈な存在証明でもある。

原之夫「被爆の底で」

原は長崎の梁川町で被爆。作家としてより画家として知られ、例年八月には長崎で個展を開く。原爆絵本『悲しい顔のマリア』（汐文社）は小学校の課題図書となった。その体験をもとに原爆小説も書き続け、最近二〇五枚の長篇が『新日本文学』五月号に載った。「わたし」は少年の日被爆したあと長崎を逃れて上京、二十数年間原爆の記憶に脅かされないうたが、死期の近づく母を前にしてはもはや逃れるすべはなくなる。

学生演劇

のなかでの愛と別れ。同郷の被爆者との出会いと結婚。肉親たちの被爆とその後。自分の出自の謎……。それらがもつれあいながら重層的に語られ、「わたし」は否応なしに被爆の底にある原体験に引き戻されていく。掲載誌は送料共千円、希望者は証言の会事務局へ。(鎌田定夫)

ヒロシマ通信 96.1.13.31

1.1 中国新聞論壇に伊東壯日本被団協代表委員の「被爆体験の人類化へ」が掲載。広島県文団連、久保浩之運営委員長の呼びかけで「はだし供養」を開催。
1.3 広島市や放影研、広大原医研が原爆資料のデータベース化開始。
1.4 「市民のフランス原爆展」(岡本三夫代表)がパリで開幕。
1.20 広島市が国際司法裁判所での平岡市長の陳述内容をまとめ、希望者に無料配布。
1.21 府中市の市民グループ「ジュノーの会」の招きでウクライナの医師ミコラ・デムチェンコさんが来広、子どもたちの甲狀腺がん治療のための研修を積む。24日まで。
1.27 核実験全面禁止を求める国際共同行動日「ネバダ・デー」の座り込みで県原水禁や県被団協(伊藤サカエ代表)のメンバーが仏・中の核実験強行に強く抗議。シンポ「あらためて原爆遺跡保存を考える」に130人が参加。
1.28 仏、6回目の核実験強行。核実験中止広島緊急行動委員

会、広島県被爆二世団体連絡協議会、広島平和のリボンの会、「ピースリンク広島・呉・岩国」など諸団体、抗議行動。
1.29 広島県環境衛生同業組合、50万を越える仏核実験反対署名を集める。県被団協(金子一士理事長)、県原水協の抗議の座り込みで約120名参加。仏政府への抗議文と日本政府への要請文を採択。広島市長、橋本首相に海外原爆展を国家事業として開催するよう要請すると記者会見。
1.30 仏大統領、「模擬実験データ確保に成功」と核実験終結を宣言。県被団協(伊藤サカエ理事長)、県原水禁、496回目の座り込みで仏の核実験に抗議。
1.31 市民団体など核兵器開発の方針を変えない仏・中に対し相次ぎ抗議表明。
2.4 広島と長崎の原水禁がニューヨーク・タイムズに掲載した反核意見広告に米国市民千人が賛同署名。
2.5 放影研の将来像を探るブルーリボン委員会の初会合。重松理事長が放影研の成立と活動を紹介。広島平和文化センターの原爆関係文献調査委員会が原爆関係文献1500をリストアップ、また全国から約300の文献

資料を収集。
2.6 パリ原爆展が開幕。県被団協の坪井直事務局長ら9人が広島から現地入りし被爆体験を語る。
2.8 平和公園の被爆建物レストハウスの保存を求める二つの市民団体が街頭署名。ヒロシマを語る会、平和公園に建設される「原爆死没者追悼平和祈念館」に関する要望書を市議会議長へ提出。
2.10 広島高校生平和ゼミナールが解体計画中のレストハウス見学や萩井和夫記者の講演などによる「みつめようヒロシマ」を開催、50名参加。県原水協主催「沖繩を学び連帯するつどい」に60名が参加し、沖繩県原水協芳澤理事長が講演。
2.17 「ピース・クリエイト・シンポジウム、21世紀の平和公園を考える」開催、150名参加。
2.19 フォトジャーナリスト広河隆一氏がチェルノブイリ問題について講演、現地報告。
2.20 中国新聞に「米スミソニアン博物館・原爆論争その後」の連載始まる(萩井記者)。
2.24 長崎の証言の会の鎌田定夫氏が来広「広島への会」再建に向けて懇談。
2.25 三菱広島・元徴用工被

爆者の裁判を支援する会の集会で金順吉氏が訴え。60名参加。「被爆者の自分史を書くつどい」の今年初の会合、鎌田定夫氏がゲスト参加。
3.1 中国首相、核実験継続表明で、広島被爆者団体などいっせいに抗議コメント。県原水協などの原水禁禁止世界大会広島実行委員会が「3.1ビキニデー広島集会」を開催。
3.8 広島県による被爆者実態調査が終了。42324人分を回収、12978人が被爆体験を記載。
3.19 「原爆と文学」96年版発行。編集委員でゼロ歳被爆者の篠垣潔氏のインタビュー記事が中国新聞に掲載される。
3.20 胎内被爆者とその家族で作る「きのこ会」が患者の50歳を祝う会を開催し、支援組織の結成を決める。
3.29 在韓被爆者の沈載烈さん(63)が被爆者援護打ち切りに関して広島市へ質問状を提出。
3.30 原爆被害者相談員の会、原爆症認定手続きに関する学習会、40名参加。広島市民病院総合相談室の塚本弥生理事が認定申請についての問題点の多いことを指摘。(文責・吉岡雅弘)

ナガサキ通信 95・1・7〜31

- 1・7 長崎市民の会、仏核実験(95・12・28)抗議の座り込み。
- 1・9 「被爆都市長崎市民の声」(河地貫一会長)「もんじゅ事故」で福井県民と交流の方針。「ヒロシマ・ナガサキ・アピール」署名推進委、長崎市で署名活動。
- 1・13 県原水協、「反核署名が県内過半数に」と発表。
- 1・19 「長崎にふりそでの少女像を作る会」の京都・綾部中の生徒らが長崎市訪問。長崎原爆松谷訴訟第9回口頭弁論。(福岡高裁)
- 1・21 松谷訴訟を支援する会、長崎市で街頭行動。
- 1・24 長崎市長、仏核実験を厳しく批判。
- 1・27 ルモンド紙に長崎大学医学部有志、反核意見広告。松谷訴訟を支援する会、定期総会・提訴7周年のつどい。
- 1・28 仏6回目の核実験強行。抗議行動拡がる。長崎市深堀中2年生、シラク大統領に抗議の英文メッセージ。巻岐・箱崎中3年生、「鎮魂の海峡」上演。
- 1・30 仏核実験終了宣言。怒りの声むしろ高まる。

- 2・1 米海軍、掃海艦2隻を日本で初めて佐世保市に配備。
- 2・3 被爆二世団体全国連絡協議会総会開催(長崎市)。
- 2・4 市民の会、6回目の仏核実験に抗議の座り込み。
- 2・8 長崎市長、新年度に「平和推進室」新設を言明。長崎平和推進協「平和懇談会」開催。
- 2・9 長崎市長、新年度から全校に被爆の語り部派遣を言明。
- 2・10 長崎市、被爆直後の未公開フィルム入手。
- 2・11 「建国記念の日」30周年、各地で賛否の集会。長崎県教組2・11平和教育研究集会。
- 2・13 韓国の被爆二世一行、長崎市訪問・交流。長崎市、被爆写真などを韓国に寄贈と決定。
- 2・14 被爆地域は正連絡協議会、県出身議員に陳情。
- 2・17 被災協、第2回「昭和を考える会」。絵本「吉田さんの8月9日」を作った福岡・三並小6年生ら長崎・城山小と交流。憲法と平和を考える長崎女性の会「沖繩」学習会。
- 2・21 パリでの原爆展参加者3人、県庁で帰国報告。「松谷訴訟の勝利をめざす東京集会」で松谷さん決意表明。
- 2・22 長崎市長、来春ドイツ

- での原爆展開催を言明。
- 2・23 長崎市教委、新年度より平和教育充実の方針。長崎市長、CTBT問題で来春、ジュネーブ軍縮会議に要請する計画を発表。
- 2・24 長崎市長、「如己堂」の解体・復元を決定。
- 2・29 「もう一つの3・1を考える集い」で韓国原爆展に反対した盧炳禮氏講演。
- 3・1 パリでの「ヒロシマ・ナガサキ原爆資料展」の報告集会(長崎市)。3・1ピキニデー集会(長崎地区労)。3・1市民集会(長崎新聞労組)で外語短大新井信之氏基調講演。
- 3・2 国際婦人デー長崎集会、憲法と平和を考える長崎女性の会。
- 3・4 「被災42周年ピキニデー長崎集会」(県原水協ほか)。
- 米原潜ピントダが佐世保入港、今年3回目。
- 3・6 長崎市聖母の騎士中・高生、永井隆博士を描いた創作劇「平和の鐘」を上演。国際平和ボスター・コンテスト(30万点応募)に諫早市小野中1年、小木曾理恵さんが優秀賞受賞。福岡市の故・津守長正さんの遺品、被爆直後の写真11点が長崎市に寄贈。
- 3・7 長崎市長、原爆資料館に「加害責任」展示を特設せずと

- 言明。
- 3・8 厚生省被爆者実態調査に全国から体験記約58000。
- 3・9 岡まさきはる記念長崎平和資料館でビデオ上映始まる。長崎平和講座(平和推進協)初年度の修了式。次年度も続行。
- 3・10 恵みの丘長崎原爆ホームで創作劇「被爆——16歳の私が失ったもの」上演。
- 3・11 米原潜プレマートン、佐世保入港。
- 3・13 長崎市、爆心地標柱にかわり富永直樹氏による女神像を建立する方針を発表。
- 3・17 県立富山女子高修学旅行生が故・渡辺千恵子さんを描いた絵本「平和の旅へ」を遺族に届ける。
- 3・24 在米被爆者5名、治療のため来日、手帳交付を受ける。
- 3・25 長崎の原爆資料展示を考える市民連絡協、市に展示内容変更について抗議の申し入れ。
- 3・25〜26 沖繩・代理署名訴訟判決に抗議行動(新婦人、平和センター、地区労ほか)。
- 3・30 長崎平和推進協理事・評議員会で市長、協会活性化のための「検討委」設置を提案。長崎女性の会「3・11沖繩集会」報告会。(文責・編集部)

会員・読者通信



51年目、原点からの再出発

広島市 沼田 鈴子

昨年は50年を生かされている思いで大多忙で、私も自分を振りかえることもなく動きました。51年目の今年は、自分にとって原点を見つめる再出発の年です。

昨年は一月四日からブルトニウムアクションの大庭里美さんとパナマに行きましたが、今年は一月初二日からフランスの原爆展に参加しました。報告集を同封します。パリでは市民レベルの交流で、知人友人を多く得られ幸いでした。

三月二十二日から二十七日までタイと中国雲南省に、また四月十三日から十六日までグアム島に行きます。高校の招きですが、グア

ム、テナアン……複雑な気持ちです。

悔いなく生き切りたい

熊本市 野中 勝美

3月14日、熊本県の婦人会館で県原爆被害者の会(現在、原爆被害者団体協議会と改称)の役員会を開催し、平成8年度の運動方針その他を協議しました。

議事が終了し、閉会寸前、皆様も予想しておられなかったかと思いますが、私は会長職を今年で辞めさせていただくよう提案しました。例えば国鉄を55歳で定年退職し、当市へ来て、ある会社の常務取締役勤務の傍ら被爆者の会の理事を勤めました。厚生年金、国鉄年金と二つ頂きましたので会社を辞め、51年5月、紺屋今町にあった市役所別館の被爆者相談所の事務局長となりました。53年に副会長、62年熊本市の会長、63年県の会長となり、原爆遺族会々長等を兼務しました。(熊本市は平成2年県と分離し谷口清美さんが会長)平成2年6月、原爆犠牲者の碑を作る準備会々長となり、7月、作る会へと移行、二千万円余の浄財を集め、昨年8月6日、黒髪小峰

墓地公園に建立へ。原爆で傷ついた男性を女性が抱えているブロンズ像で、知事、市長、県民が臨席し、盛大に除幕式と慰霊祭が挙行されました。

やがて被爆者がいなくなってもこの碑は未来永劫、原爆の悲惨さ、非人道性を想起させ、犠牲者の冥福を祈るとともに、核兵器廃絶・恒久平和の達成を誓ってくれるでしょう。

長崎原爆救援列車の運転は、国鉄長崎管理部列車司令として私が計画決定したもので、その日運転した四列車は、約二五〇〇名余の負傷者を、諫早、大村、嬉野、川棚の海軍病院へ輸送しました。

54年秋、勲6等瑞宝章を受賞、11月7日に家内とともに宮中豊明殿にて叙勲証書をいただきました。その時の写真と叙勲の功績調査は今も大事に部屋に掲げております。

6年3月、フランスから救援列車の記録を至急送ってくれと要請があったとの連絡をいただき、早速送ったところ、すぐファックスで「各地に紹介しました」とのお礼の便りがありました。これはまもなく「ナガサキ」というビデオの中に加えられ、世界で上映され

ました。

私の健康状態は大変良好です。動物は成長期の五倍生きるといわれますが、人間25才を成長期とすれば一二五才迄は生きられるわけです。この学説を信じ、悔いなく生き切りたいと思います。第一線を退いても、またお役に立てばご用命下さい。

全人類への訴え

熊本県 北御門二郎

今日「証言」(二九九四、九五)が届きました。早速頁をめくりながら、衷心から平和を願う人々の熱誠に触れて無上の喜びを感じました。ヒロシマ・ナガサキの証言は、そのまま(人間として為すべからざる事は為すべからず)との全人類への訴えだと思えます。今後とも「証言」を通じてのみならず、ご活躍を心より祈り上げます。長崎へはこれまでに数回訪れましたが、生あるうちにもう一度くらい訪ねたいものと思えます。ご健闘を念じ上げつつ。